桜が丘高等学校軽音部の６人

螢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜が丘高等学校軽音部の６人

【Ｎコード】
Ｎ４４７２ＢＡ

【作者名】
螢

【あらすじ】
共学化された桜が丘元女子高に進学した北村　匠、桜が丘高校の軽音部がなかなか有名だという噂を聞いて、軽音部に入った、彼と軽音部が送る日々とは・・・

プロローグ（前書き）

どうも、螢です駄作とは思うかもしれませんがぜひ見ていってください。あとありがちな共学話です。

それではどうぞ

プロローグ

「ここが桜が丘高校かぁ」
校門に立ち、のんきにしみじみと呟く青年
「にしても・・・全然男子が見当たらないなぁ」
キョロキョロと周りを見渡す青年、だがそこには男子の数はポツポツといるかいないかぐらいにしか見えなかった。それもそのはず、今年に入って初めて共学化になったのだから。今年の一年生の男子比率は全体の半分の半分の半分以下といっても間違いないくらいだ
「まぁ、頑張りますか」
そう気合を入れて、青年は校舎のほうに歩いて行った

『続いて、校長先生の話です、校長先生お願いします』
コツコツコツ
『えぇ、一年生のみなさん進学おめでとうございます・・・』
「あ〝ぁ、入学式ながいなぁ、」
入学式にケチをつける青年
「だいたい入学式なんて、半分以上が校長の話で終わってってんじゃん
それにぜってぇみんな聞いてねぇと思うしなぁ」
青年の不満はエスカレートしていった
その後校長の話は約15分ほど続き、入学式が終わった

こうして、青年の高校生活の第一歩目が始まった

プロローグ（後書き）

こんな感じなんです、プロローグはあんまり思いつかなかったので次回から頑張ります。

プロフィール（前書き）

どうも、今回は主人公のキャラ設定です

それではどうぞ

プロフィール

主人公設定
名前：北村（きたむら）　匠（たくみ）
生年月日：１９９３年７月３日
身長：１８０ｃｍ
体重：７３ｋｇ
パート：リズムギター　ボーカル　コーラス
血液型：Ａ型
利き手：左手
外見：肩まで伸びた真っ黒なロングヘアーで、目の色は茶色、また帽子をよくかぶりプライベート、ライブなどでは必ず被る
使用楽器
ギター：ギブソン　ＥＳ－３３５

桜が丘高校の軽音部が有名という理由で桜が丘高校に入り軽音部の唯一の男部員であり、少し肩身の狭い思いをしている様子、感が若干よく、危ないと思ったことはだいたいが当たる、逃げようとするが、軽音部の先輩たちにすぐにつかまってしまいあまり役に立っていない様子、また作詞・作曲を一人でやって見せたり（中身は少し乙女チックな物と、生死を考えさせられる物がある）、声の高音などの調節ができていて音楽に関しては長けている。
父親がアメリカ人で幼稚園のころから小学校４年生までにかけてアメリカに住んでいたため英語は寛容であり、彼が作る歌詞にも英語が入っていて、ギターの実績も長く小５から始めたらしい、また両親が外国で仕事をしているので家事は全部一人でやっている。幼稚園のころからアメリカでピアノを習っていて、人に聞かせる程度なら弾ける。

かなり優柔不断であまり自分一人で物事を決めたことがない、なのでコンビニなどに行くと小１時間ぐらいは、買い物にかかるかかるらしい、また帽子が好きで数種類の帽子を持っていて、学校生活以外（ライブを除く）では、必ず被っている。
利き手は左手なのだが右利き用のギターを使っていて本人曰く「長所は短所になる」という理由で使っているらしい。
視力が０．２と非常に低く、普段はコンタクトをしているがたまにメガネをかけることもしばしばある。
唯や律によくいじられていて、当の本人は、先輩と話せるきかいができてうれしいと、ポジティブに考えている。根本的に人と接することは好きらしい。

プロフィール（後書き）

気づいている人もいると思いますが、これはＲＡＤＷＩＭＰＳの野田洋次郎をベースとして、書かせてもらっています。ちなみにけいおん！！の世界にはＲＡＤＷＩＭＰＳは存在していませんがＲＡＤＷＩＭＰＳの歌は出てきます。

それではまた変更があったらきますので

1話　部活！（前書き）

今回はちょっと原作にそってやっていきたいと思います

それではどうぞ

1話　部活！

小説本文　「えぇ、ここの担任を務めることになりました。以後よろしく頼む」
と、教壇に立って自分の自己紹介をする男の担任
「されじゃぁまず、一人ずつ簡単に自己紹介をしていってもらうぞ」
そう担任がいい、前の女子から自己紹介を始めた、ちなみにここは、1年5組であり男子は4人しかいない、そういうのも使用がない、何度も言うようだが、今年共学したばかりで男子が飛躍的に少なく、男子は20人くらいしかいない。
「おい！次のやつ早くたたんか」
「あ！すいません」
教師に怒られあわてて立つ青年、周りの女子たちはクスクスと笑いながら青年を見ている
「えぇっと・・・北村匠といいます。得に言うことはないです」
そう言って立ったとたんすぐに座る匠
「・・・そうかじゃぁ次のやつ」
教師は匠を少し睨み次のやつに自己紹介を回した
（ん？・・・俺いま睨まれた？俺なんかしたか？）
そんなことを考えていた匠、自己紹介が終わると教師が学校の設備や注意事項など話し、プリントなどを配っりおえ、時間はどんどんたっていっき部活の勧誘時間になった

「うわぁすげぇなぁ」
匠はそう声をもらした

『柔道部で熱くなってみませんか！』
『バスケ部でーす、新入生募集中でーす』
『テニス部でーす、初心者でも経験者でも大歓迎でーす』

いろんな部が新入生勧誘のため周りを見渡せば声を張り上げる女の子であふれていた

「なんかいあつがすげぇな・・・ん？・・・あれは何の部だ？」
匠はなんとなく雰囲気が違うのをかんじ横を見てみると5人（匹）？の動物たちがチラシを配っていた
「あれは・・・着ぐるみ・・・だよな、てことは演劇部か何かか？てか顔コワッ！」
そう一人でしゃべりながら匠はその場を去って行った

「ふぅ、高校も楽じゃないなぁ」
匠はネクタイをゆるめながら一回の中庭に続く廊下を歩いていた
「にしても高校ってこんなに広いものなのか？・・・ん？あれは・・・だれだ？」
目の前に頭にヘアピン女の子がちょこんとすわていた、するとその子は匠に気付きトコトコと近づいてきた
「ねぇ、君って新入生の子だよねぇ、うわぁ身長高いね」
そういいながら女の子が匠の顔を見上げた
（この子誰だ？・・・リボンが青ってことは3年ってことか、ってそんなに見つめないでほしいなぁ）
匠はそう思いながら女の子から少し目をそらした
「ん？どうしたの？」
全くきずいてない女の子は匠にポカーンとした顔で言った
「い、いえ別にところで俺に何か用ですか？」
匠は自分の気を立て直し女の子に聞いた
「あ！そうだった、実はね軽音部で新歓ライブやるんだけど、よかったら見に来てくれない？」
女の子はそう言って匠の顔をじっと見つめた
「新歓ライブ？」
匠は女の子に聞き返した

「うん、私たちでやるんだー」
浮かれた声で答える女の子
「へーそうなんですか・・・わかりました、見に行けたら行きます」
匠は女の子のお願いに答えた
「え！ホントに？ありがとー」
そういいながら女の子は匠の手を握り締めた
「えっ！ちょっと」
匠の顔はみるみる赤くなった

「おーい、ゆいー何してんだ、おいてくぞ」
と、どこからか声が聞こえてきた
「あ、うん待って、それじゃバイバイ」
そう言って女の子は匠に手を振りすぐに去って行った
「・・・なんだったんだ今のは？・・・なんか余計疲れた気が・・・」
そういいながら匠はダルそうに歩きながら来た道を帰って行った
「まぁでも、軽音部のうわさを聞いてこの高校に入ったわけだし、お手並み拝見といくか」
そう呟きながら、匠は自分のクラスへと向かった

1話　部活！（後書き）

まだ続きますので、あと駄作ですがなおしていければいいなと思っています

それではまた

2話　入部（前書き）

今回も少し原作に沿っていきます

それではどうぞ

2話　入部

「えーっと、講堂は・・・こっちだっけ」
匠は女の子に頼まれた通り軽音部の新歓ライブに向かっていた。
「ここだな・・・よし！」
匠は扉を開けたら目の前に5人の女の子達が目に入った。
「全員楽器を持ってるってことは、もう始まったか」
そう思い匠はあいている長椅子に腰をかけた。
「やっぱ女子多いなぁ・・・」
そう呟きながら匠は周りを見渡した。男子もぽつぽつ見えるが、やはり女子のほうが目に入る

『新入生のみなさん、入学おめでとうございます・・・』
ボーカルの子がMCを始めた
「お！はじまった、ん？・・・あの人ボーカルだったんだ」
そう、そのボーカルはヘアピンをした女の子だった、他にも髪の長いレフティのベースの女の子と、ツインテールのギターの女の子と、後ろにはカチューシャをしたドラムの女のかと、クリーム色の長い髪のキーボードの女の子がいた
「てか・・・女の子しかいないんだ・・・」
匠がそんなことを考えているとMCが終わり演奏が始まった

♪～～・・・？～～～・・・♪～～～～？～～～～
「・・・」
匠は前の五人を食い入るように見ていた
（なんだろう・・・演奏はイマイチなのに、なんか胸奥からぐっと来る感じ・・・これがうわさの理由の一つかな？）
そうして、演奏が終わり、どこからともなく鳴りやまない拍手が講

堂内に響き渡った

「・・・軽音部はいってみようかな」
そう呟きながら、講堂を出ていろんなところをふらふらしていた匠
「でもな～なんかやな予感がすんだよなぁ」
だが何らかの危険を察知した匠はそう呟いた
「・・・明日決めるか」
匠はそう考え教室に戻って行った。そして下校の時間になった

桜が丘高校、新入生が入り数日がたった
「う～んどうしようかなぁ」
まだ悩んでいた匠
「軽音部の演奏にはなんか引き寄せられる感じがあんだよなぁ、でもなんか尋常じゃないほどいやな予感もするし。」
匠はとても優柔不断で、一人では決めることができなかった。
そうして授業が始まったが匠はまだ悩んでいた

「それじゃぁこの問題・・・北村言ってみろ」
と教師が匠をさしたが、
「・・・」
全く返事がなくボーっとしていた
「おい！北村」
教師が匠の名前を叫んだ
「・・・へ？」
やっと気付いき匠は、間抜けな顔をしていた
「お前・・・入学できたからってもう結構立つんだ、切り替えぐらいちゃんとつけろ」
と、匠に向かって説教を始める教師
「あぁ、すいません」

匠は周りの注目を浴びながら教師に誤った
「じゃぁこの日本語を英語で言ってみろいてみろ」
教師は匠に無茶ブリをした
「えーっとＡｌｔｈｏｕｇｈ　Ｉ　ｗｏｒｒｉｅｄ　ｓｅｖｅｒａｌ　ｄａｙｓ　ｂｅｆｏｒｅ，　ｓｉｎｃｅ　Ｉ　ｈａｖｅ　ａｌｒｅａｄｙ　ｓｏｌｖｅｄ，　Ｉ　ｆｅｌｔ　ｉｔ　ｒｅｆｒｅｓｈｅｄ．　（私は、数日前から悩んでいましたが、もう解決したのですっきりしました）ですか？」
匠はそんなことお構いなしに答えた
「せ、正解だ」
教師はびっくりした顔で言った、周りの生徒もビックリしていた
（そんなことより俺の悩みが解決してないんだって）
そう匠は、心の中で突っ込んだ、そうして時間は流れあっという間に放課後になった

「よし！決めた一回行ってみよう、そのためにこの学校に入ったんだしな」
ようやく決心した匠は軽音部に向かった
「えーっと確か、軽音部は・・・音楽準備室だったけ？」
匠は、この前聞いたことを思い出して、さっそく音楽準備室に向かって行った

「ここが軽音部か・・・このカエルなに？」
匠は、ドアの前に置いてあるカエルの置物を見て言った
「それにしても軽音部なのに静かだなぁ、ま、いっか、よし！」
決心を固めた匠は、軽音部の扉を開けた。

2話　入部（後書き）

まぁ、とりあえずこんな感じです

それではまた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4472ba/

桜が丘高等学校軽音部の６人

2012年1月13日01時47分発行